

地域教育遺産を活かした学習デザインとその意義

－三和創造学習の検証を通して－

Leveraging Regional Educational Heritage in Learning Design and Its Significance

: Through the Examination of the Miwa Creative Learning Model

吉田武彦・張 明軍・岡部成幸

Takehiko Yoshida・Mingjun Zhang・Nariyuki Okabe

要旨

本稿は、統廃合された地域小学校における地域学習デザインの再構築を目指し、京都府福知山市三和町にある三和学園の三和創造学習を事例として取り上げる。本稿では、「地域教育遺産」という概念を導入し、次世代に伝え継承すべき地域的価値を再評価する。具体的には、実体験に基づく学習、地域文化との結びつき、多角的な学習内容、感情と共感の育成、地域コミュニティとの連携、環境学習と持続可能性、実践的なスキルの習得、継続的な学習と関心の育成などの学習デザイン要素を分析した。本稿は、児童・生徒の自立とアイデンティティ形成、地形と自然環境に対する理解の深化、伝統的生産技術の探究、世代間交流の重要性と教育的価値など、地域学習の多面的な意義を浮き彫りにした。さらに、都市部と農村部の相互理解を促進し、持続可能な社会の構築に貢献することを目指し、三和創造学習を通じて提供される里山文化や地域文化の体験が、都市住民にとって学びと発見の場となり、地域社会との共生と相互理解の促進に寄与することを示した。

キーワード: 三和創造学習、学習デザイン、地域教育遺産、学習意義

Keywords: Miwa Creation Learning, Learning Design, Local Educational Heritage, Significance of Learning

1. 背景と目的

「過疎地域」に指定された地方自治体の増加に歯止めがかかっていない中、児童生徒数の減少などにより、過疎地域における小学校や中学校の統廃合が行われている。文部科学省は学力向上と人間関係多様性において、児童生徒の変化を期待する一方、地域との関係希薄化を防ぐ工夫が求められている。西村（2014）は統合校及び児童生徒への支援のみならず、地域活動の意味を再確認し学校と地域活動の関連性について検討するための支援が必要となり、統廃合前の連携活動（保護者、地域住民と旧小学校）を踏まえて統廃合後の新たな連携を探ることが、地域住民同士、統合校と地域との繋がりを生むための糸口となると指摘している。梅田ら（2004）では地域の組織や住民との連携の改善・発展について、「学校側は望む協力内容を具体的に伝え、地域の提供し得る協力内容を把握し、地域側が学校の意図や取り組みの熱心さを汲み取った上で積極的に協力していく等、相互に理解し合える関係の構築が重要となる」と提案している。

しかし、過疎化の進行により、地域既存組織や慣習維持、また今まで大切にされてきた地域の歴史文化を継承する困難さが増している。地域の歴史文化などを教育資源として学校に提供することは限界が見えた中、統合後の学校と地域との関係希薄がより深刻化になると懸念されている。松本ら（2017）において地域に根ざした学校教育活動を通じて、子どもは地域とのかかわりが増え、定住志向を高めていると示している。そういった知見を鑑みると、「地域を教えないことが過疎化の進行につながっていないか」との問題意識が浮上してくる。

そこで本稿は統廃合の背景を踏まえて、統廃合後の地域学習デザインに「地域教育遺産」（次世代に伝え継承すべき地域的価値のあるモノ）という概念を取り入れ、地域学習の意義を再提起し、特にデジタル化の一方で、地域学習で必然となる具体物や対面による五感での学びの重要性を実践的に明らかにする。そして、「地域教育遺産」を活かした地域学習事例への考察を通じて都市住民の農山村地域への理解を深め、都市部や他地域からの移住者（I・U・J ターン）、交流人口の増加に寄与したい。

2. 研究対象の選定

本稿は京都府福知山市三和町にある三和学園の三和創造学習を取り上げ、研究対象として選定する。

三和町は農業が主要産業であるが、耕作放棄地の増大、農業担い手の不足等の課題を抱えている。繭、茶や煙草などが主要商品であったが、現在、丹波栗、三和ブドウ、万願寺甘とうが知名度の高い農産品となっている。矢口（2020）によれば、三和町の特徴として、自然・自然環境の側面において魅力となりうる資源が存在し、管理放棄されて自然に戻りつつある資源もある。1970 年から過疎地域と指定され、人口は指定時の 5464 人から、2006 年（福知山市への合併）の 4240 人への減少を経て、2023 年の 2992 人に激減し、人口減少型過疎から世帯減少型過疎に急速に移行している（岡部 2023）。2015 年以降、三和町全体の小学生は 100 人程度、中学生は 50～60 人に止まり、小学校・中学校ともに学校運営の危機にあった。2015 年、町内の川合小学校が閉校し、2019 年に細見小学校、菟原小学校も閉校し、三和小学校と三和中学校による小中一貫教育校「三和学園」が開校した。開校

時の生徒数は、計 128 人、学年別には 1 年生が 10 人、順次 10 人、13 人、12 人、13 人、20 人、17 人、23 人、そして 9 年生が 10 人となっている。開校とともに誕生したのが三和創造学習である。教育課程特例校とし、3 年～6 年で年間約 50 時間、1 年～2 年、7 年～9 年で約 25 時間位置づけている。

開校時に三和学園設立準備委員会(地域・学校・行政)が作成した「三和学園開校の記録 ふるさとの期待と願い」は、三和学園の特色ある教育の一つとして「ふるさと三和から学ぶキャリア教育」を三和創造学習とした。その実践は学校と地域の人たちとの約束、新たな学校への決意である。

上記のように、三和創造学習は過疎地域に根ざし地域を活かす児童生徒向けのキャリア教育であるため、本稿は三和創造学習を取り上げ、過去数年間の実施結果への考察を行う。

3. 三和創造学習デザイン

3.1 三和地域まると博物館三和地域調べ

三和地域を学ぶ学習を展開するためには地域の情報にアンテナを張り、地元の新聞や市役所三和支所などのチラシ、地域行政施策、三和地域協議会などの機関ニュースなどを集め、地域をまわりながら地域の新しい動きをつかもうとした。毎年新しい出来事を中心に夏休み中に中学生による地域調べを実施し、三和町の新しい動きをつかんできた。このことは人口減少という面だけでなくその中でも移住者 I ターンの人たちが新聞で取り上げられる活動をされていることにも視点を当てることで

表 1 三和創造学習関連のカリキュラム

学年	1 学期(4 月～7 月)	2 学期(8 月～12 月)	3 学期(1 月～3 月)
1	雑木林を歩く		たぬきの糸車
2	雑木林を歩く・みわファーム	郵便局・郵便集配	スーホの白い馬
3	三和ぶどう、牛の飼育、薬師堂と耳石、京街道散策	防火施設調査(毎年自治会変更)、移動販売車	昔の暮らし、鮭飼育放流、鮭文化アイヌ文化、民話
4	養蚕と製糸、訪問蚕	狛犬昔話 58 年の災害と復旧、三和の防災	地域の発展に尽くした人 神楽・ヤンゴ踊り
5	バケツ稲・田植え・井堰水路	たずねびと原爆、稲刈り、はざ掛け、脱穀・選別・粃摺り・精米、しめ縄作り	三和の産業
6	京街道と細野峠	福知山城由良川水運	近代の歴史と三和
7	舞鶴学習・浮島丸殉難者像、引揚記念館、朝鮮文化、里山学習・里山生活、地域に学ぶ講座Ⅰ	地域調べ報告、三和フェス企画、地域に学ぶ講座Ⅱ	ジョブガイダンス
8	京都学習・三和景観、古民家、製縄所・アンネのバラ 地域に学ぶ講座Ⅰ	地域調べ報告、先端企業訪問、三和フェス企画、福知山公立大生交流、地域に学ぶ講座Ⅱ	ナガサキ修学旅行事前学習・核と破壊力被害
9	長崎学習・ふりそでの少女像、廃校利活用企画、地域に学ぶ講座Ⅰ	三和フェス企画、廃校利活用企画発表、福知山公立大生交流、奥の細道講座、地域に学ぶ講座Ⅱ	

きた。過去 8 年分の地域しらべ（計 300 程度のテーマ作品）は三和地域協議会のホームページに掲載され、「三和地域まるごと博物館」と検索すれば閲覧できる。この地域情報および地域コミュニティとの連携は、三和創造学習プロセスにおける変革を促進している。表 1 では主なカリキュラムを示し、表 2 では地域学習内容を選ぶ主な観点を示す。

表 2 地域学習内容を選ぶ主な観点

学年	視点①地域文化学習	視点②多文化共生・平和学習
1 年	雑木林を歩く、たぬきの糸車・棉と綿糸	
2 年	雑木林を歩く、郵便局と集配・羊と羊毛	スーホの白い馬・モンゴル文化
3 年	お地藏様・狛犬、地域の信仰・三和の民話、防火、ぶどう、移動販売車・工場で働く人	さんねん峠と朝鮮文化・サムルノリ 鮭とアイヌ文化
4 年	三和地域の防災、地域の発展に尽くした人 養蚕と蚕業遺産、信仰	地域の伝統芸能・伝統文化
5 年	農業と多機能な役割・林業・わらの文化、三和の産 業、轟水・大ゆり井堰・水路	日本の文化、たずねびと
6 年	日本の歴史・文化、三和の山城、京街道・由良川水 運・福知山城下町	日本の歴史・文化 15 年戦争と三和、芦田均記念館
7 年	三和地域の里山学習	舞鶴校外学習(事前・現地学習)
	里山文化…古民家・里山生活地域散策、 三和地域調べ(地域訪問 1 人 1 テーマ) ジョブガイダンス、地域に学ぶ講座	浮島丸殉難者の像・引揚記念館 韓国文化、舞鶴・三和と戦争 大陸からの引揚、日本からの引揚
8 年	京都校外学習(事前学習)	京都校外学習(現地学習)
	京都を支える丹波の文化…祇園祭わら縄づくり・ 古民家・景観・アンネのバラ、三和地域調べ(地域 訪問 1 人 1 テーマ) 公立大生交流、地域に学ぶ講座	日本文化、京都と戦争平和 祇園祭ぎやらりー・町家・借景・ 伝統的建造物群・耳塚・方広寺
9 年	三和地域の創造学習	長崎修学旅行(事前・現地学習)
	三和の文化…三和ミニツアー・イベント企画、閉校 利活用企画づくり、公立大生交流・地域に学ぶ講座	ふりそでの少女像、ハウステンボス 中国文化、世界平和…世界平和と核 原爆遺構巡り、在日コリアン(人権学 習)

3.2 学習事例

●3 年、鮭の卵をふ化させ、稚魚を放流 2019 年度～2023 年度

川合地域の大原神社にはその起源にも由来する鮭の神様を祀る飛瀧峯社があり、まず、児童たちは大原神社にある飛瀧峯社を訪れる。ここは鮭を祀る神社で、地域の鮭にまつわる民話を学ぶ絶好の場所である。三和学園の廊下には 5 つの民話が展示されており、4 年生になるまでにこれらを読むことを推奨する。

3 年生の 3 学期には、鮭に焦点を当てた学習が行われ、生徒たちは三和地域の鮭文化を学び、実際

に鮭の卵を育て由良川に放流する体験をする。卵から鮭が孵る瞬間を目の当たりにしたり、弱った稚魚を他の稚魚がつつく様子に心を痛めたりするなど、生徒たちはこの活動を通じて生命の尊さや自然とのつながりを深く感じている。また、毎日水温を測定して積算温度を計算し、稚魚の成長や放流時期を計画的に観察し、記録している。

生徒たちは鮭の生涯についても学べる。鮭は3～5年の寿命を持ち、由良川から日本海を経てオホーツク海、ベーリング海、北太平洋を回遊し、大きく成長してから由良川に戻ってくる。このことは、半世紀にわたる由良川での鮭回帰の取り組みから得られた成果である。

さらに、鮭や鱒に関する「杵の宮伝説」などの紙芝居や物語を通じて、地域の伝説や歴史を学んでいく。サケの町新潟県村上市の「青砥武平治物語」では、鮭の保護とその歴史についても学べる。アイヌの民話を聞き、鮭を「神の魚」とするアイヌの文化に触れ、アイヌの刺繍やモレウの折り紙工作を通じて、アイヌの考え方や鮭の捕り方、鮭の皮を使った衣服の作り方なども学べる。

実物の鮭に触る機会もあり、海洋高校から提供された鮭や乾燥した鮭を通じて、アイヌの人々がどのように鮭の皮を利用して衣服や履き物を作っていたかを実感させた。海洋高校の先生による出前授業もあり、由良川の魚たちや鮭の標本を直接見て触ることで、子供たちは大いに興奮した（図1）。

最後に、由良川と土師川が合流する福知山城下の明智藪対岸の浅瀬で、育てた鮭の稚魚を放流した。この時、コップに入れた稚魚をゆっくりと、その行方を目で追いながら見送ることで、生徒たちは育てた鮭への思いや自然とのつながりを大切にする（図2）。

このように、地域の自然と文化に根ざした教育を通じて、生徒たちは生命の尊さや自然との共生について学ぶ機会を得ている。



図1 出前授業



図2 鮭の稚魚の放流

取り入れた学習デザイン要素：

- ◎実体験に基づく学習；◎地域文化との結びつき；◎多角的な学習内容；
- ◎感情と共感の育成；◎コミュニティとの連携

●4年 養蚕・製糸

かつて福知山（天田郡）は蚕都として栄えた。京都府の繭の生産高は綾部（何鹿郡）以上に多く、ずっと京都府最大であった。合併した大江町（加佐郡）を入れるさらに増える。蚕業遺産としてお蚕

さんに関わる信仰や遺構、今も養蚕家屋の建物が残り、蚕具がかつての養蚕農家から出てくる。大正昭和の歴史を記した由良川筋の石碑には養蚕や広がる桑畑のことなどを刻んでいる。養蚕の農繁期に休校する小学校もあった。それほどまでに生活の中にお蚕さんがいた。

今も桑の木は河川敷の道路の脇などに勝手に自生している。その大養蚕地帯に郡糸製糸などの製糸工場が誕生し、発展した。三和の小中学校では2017年以来、養蚕を続けており、その年度により取組を工夫している。蚕都であった福知山だからこそ多くの実践しやすい土壌が地域にある。養蚕で村を立て直した偉人、新たに改良した新種の桑を広めた偉人は、「地域の発展に尽くした人」という4年の教材につながる。桑は水害にも強く、由良川・土師川のたびたびの氾濫にも持続可能な産業として継続した。4年の「防災」の学習にもつながる。

手のひらにお蚕さんを乗せ「蚕マッサージや」、お蚕さんを集めて上に登ろうとすると「蚕タワーや」。昼休み、当番以外の4年生も集まり、嬉々として桑の葉や糞の掃除をする。さわることができるとなると、手の上でかわいがり、お蚕さんへの愛着が増してくる。やたら肩の上に載せたり、頭の上に載せたりする児童が多いときもあった。

昔の蚕具を使って養蚕をおこなう。まず、桑の葉を入れて運ぶ「いどこ」。校区にある桑の葉を山盛り入れ、古い布をかぶせて、水で濡らしておく。すると、桑の葉が適度な状態に数日間保たれている。以前は、毎朝先生が桑の葉を取りに行き、乾燥しすぎないよう、気を配っていた。道具は使わなければその価値がわからない。

蚕の上に「糸網」を置き、その上に桑を置く。すると、一時間の授業の間にお蚕さんは網を通して上に上がってくる。下の掃除が容易にできる。糸網は成長するにしたがって網目が大きくしてある。「毛羽取り機」。毛羽のついた繭を毛羽取り機に載せ廊下に置けば、子どもがレバーを回して、毛羽が効率よくとれるのがすぐわかる。古いモノを使う中で新しいモノを生み出す原型・本質をつかむことができる。

繭から糸を取る。繭を煮てふやかして、糸口をみつけ6個の繭の糸を一本に束ねて、巻き取る。1時間かけても繭を巻き取れない。真剣だが少し疲れてくる。しかし、そのことで蚕がいかに多くの糸を作っているのか、糸の細さ・強さを身体全体で理解する。これらはタブレットで写真や動画を撮って見ることは次元が違うものであろう。繭を作り始めた頃、お蚕さんを任せ、素直に愛着を見せる4年生に、質問した。「ほとんどの繭を乾燥させて残すけど、いいか」子どもたちは考えた。そして、「(命をつなぎ)卵にして残す繭を増やしてほしい」と答えた。

また、地域の中には養蚕に一喜一憂された人生を持つ人達がいる。高齢者サロンを訪れた「訪問蚕」の取組みは「涙が出るほど、懐かしく、嬉しかった」と、ひ孫世代の小学生に語れなかった養蚕にかけた頃の話をしてくれた(図3)。



図3 高齢者サロンでの訪問蚕交流

近年は春蚕がふ化すると、そのお蚕さんをまず5年生に見せる。1年ぶりに見た生まれたばかりのお蚕さん。「なんか嬉しい」みんないい顔をしている。1年前に命をつないだ意味を感じる。

取り入れた学習デザイン要素：

- ◎伝統文化との結びつき；◎環境学習と持続可能性；◎感情教育と共感の育成
- ◎実践的なスキルの習得；◎地域社会との連携；◎継続的な学習と関心の育成

●5年 農業

2019年コロナ禍で校外へ出られない中、バケツで稲を観察しながら育てたことをきっかけに今も継続している（図4）。一方で、大原神社産屋の前の川合地域の神社に奉納する米をつくる田んぼで田植え・稲刈りをさせて頂く。毎回6人ほどの人たちに教えてもらう（図5）。水を張った田んぼの土は、長い年月の中で土と植物とお百姓さんが作りあげてきた地域の農業遺産である。手ですくってその感触を味あわせたい。田んぼに水が張られるとどこにいたのかカエルが一斉に鳴き始める。田んぼは多くの生き物を共存させてきた。

稲刈りは鎌でおこなう。刈り取った稲はわらで束ねてくくり、持ち帰って学校で天日干しにした。多くの虫がいることもわかった。乾燥させると次は脱穀。足踏み脱穀機2台と千歯こき1台を使った。同じ足踏み脱穀機でも、逆回転しないよう改良がされた農具とされていない農具を体験的に学んだ。それでも100%稲から粳だけすることはできず、稲穂に残るので、こきばしでしごいて粳にした。

次は、粳すり。粳の殻をとる機械のしくみについて、地元の方のお話を聞きながら実際にその様子を見た。またたく間に終わり、機械の効率的なことに驚いた。実は6年生が江戸時代の農業の発達で、千歯こきと唐箕の使い方を考えたが、子どもから「もみ」という言葉がでてこなかった。そこで、もみと玄米、さらに白米を少量ずつとって展示をした。このとき、福知山市雲原で行われている水車で時間をかけて精米するお米の話をした。胚芽が残り栄養があることを伝えた。自然の風や人力を如何に活用するか。昔の農具を使うことで、機械化されていない時代の昔の人達の作業の苦労や工夫がわかる。修了式後最後のHRも早々に、早咲きの桜を見ながらもち米のお餅を担任の先生、児童達と一緒に頂いたことは忘れないだろう。



図4 土を準備する児童達



図5 田植えを体験する児童達

以下は一部の生徒の感想である。

「やっと食べれる！！本当に長かった！！2月15日ついに約1年間育ててきた「お米」を食べる日になりました。おはぎを作るときは本当に苦労して何ヶ月もかけてお米を作っておはぎをつくると思えば本当に大変なんだなと思いました。ついに食事。味は最高。こんなに美味しいおはぎは食べたことがないくらいです。お米作り楽しかったなあ！！さて、お米を育ててきた1年を振り返ってみましょう。まず夏休み。毎日、芽が出るかなと観察していました。芽が出たときは両手を挙げて喜び、こうふんしました。少し稲が伸びてきたら毎日がワクワクウキウキ。稲がどんどん成長していくのでこんなにどんどん伸びていくんだと思いました。ワクワク。私もこんなにどんどん成長したらよいなと思いました。ついに稲刈り。稲刈りは川合まで行ってもち米を刈りました。稲刈りはとても大変で、ああいっぱい刈った！！と思ってもまだ全体の4分の1くらいしか刈っていなかったので、昔の人は大変だったんだと改めて思いました。稲を刈れば次は脱穀。脱穀はいろいろな道具を使ってやりました。わりばしで地道にやったりと大変でした。いよいよ精米。どんどんお米が白くなっていくところを見れば、大変だったなあとお米作りを思い出し、もうすぐだと嬉しい気持ちがこみ上げてきました。そして、ついに白米が完成しました。長かったあ～！！このようにお米を作って、食べるのには本当に大変なことだなと思いました。1年かけて作ったおはぎはとてもおいしかったです。」

取り入れた学習デザイン要素：

- ◎実践的な農業体験；◎地域との連携と伝承；◎自然との共生の理解
- ◎実際の農具と技術の体験；◎食と健康への意識；◎感情教育と共感の育成

●6年 福知山・三和に関わる15年戦争につながる学習 2021年度

6年社会教科書で担任より歴史学習が進められた後、三和・福知山に関わる実物又は、歴史紙芝居を使った発展学習を実施した。「ともに学ぶ人間の歴史」中学社会歴史的分野(学び舎)でも学んだ。計11時間である。

表3 歴史学習プラン

No.	単元授業	歴史紙しばい	福知山・三和地域の地域史料	※備考
1	蘭学の広まりと福知山 ～朽木昌綱「泰西輿地図説」			
	歴史紙しばい	「蘭学のはじまり」		
	地域資料	泰西輿地図説(福知山高校資料館蔵)コピー		
	※	蘭学を通し事実を元に考える思考が、鎖国幕藩体制を内部から崩す力となる。		
2	百姓一揆～万延の強訴と大身騒動～			
	歴史紙しばい	「小○の旗」		
	地域資料	大身騒動と細野峠、大身騒動と万延の強訴との関係…コロナ FW できず		
	1860 年 梅干し半十郎の蜂起→万延の強訴→福知山周辺の百姓一揆へ波及 福知山藩一揆が飯野藩、園部藩、亀山藩、篠山藩、綾部藩(三和町大身)へ			
3	三和の文明開化～小学校と郵便～			
	歴史紙しばい	「文明開化と小学校」		

	地域資料 菟原校、川合校、大原校、細見校、寺尾校、生野校(上六人部) ・京都宮津郵便新路線、菟原郵便取扱所、五榜の掲示実物資料(吉田蔵)
4	富国強兵・殖産興業～養蚕業と三和～ 地域資料 FW 実施 由良川と商都福知山 御霊神社の蚕の社 三和・芦洲の養蚕・製糸に関わる石碑3ヶ所 ・三和芦洲の蚕糸業、芦洲蚕業組合の創設、郡是萩原工場、 ・城丹蚕業講習所(綾部高校)、萩原工場工女吉見よしのさんの手記
5	日露戦争と福知山 地域資料 三和にある日清・日露戦争関連碑、真下飛泉と「戦友」 ロシア兵捕虜と墓、日露戦争と福知山の戦時体制…FW できず 鉄道の開通…福知山大阪 1899 年、福知山舞鶴 1904 年
6	大正時代の福知山・三和 歴史紙しばい ・「おかかたちの米騒動」15 分 地域資料 ・福知山・三和の米騒動 5 分 福知山町・菟原村・細見村・川合村でも米安売り ・教科書…始まりは女一揆、米騒動と民衆運動 10 分…使用教科書記述なし 女性は大陽だった、デモクラシーの波 ・社会運動の高まり、自由教育の展開 10 分 → 感想 芦田恵之助は授業生として細見小学校勤務(17 歳)、後に国語教育の大家 菟原小学校・川合小学校・・・児童の個性尊重、自主性重視、級長選挙 細見小学校・・・独自に作文教授 ・政府の対応(新聞記事掲載禁止)について考えさせる 5 分 感想あり
7	満州事変と福知山・三和 歴史紙しばい 「赤い夕日」、満州開拓移民・満州青少年義勇軍と三和 地域資料 満州事変以後の三和、中国民衆の抵抗、細見村の移民、第一天田郷 教科書…世界恐慌、鉄道爆破から始まった(満州事変・国連脱退)、軍部台頭
8	アジア太平洋戦争と三和①～アジア・太平洋地域の人々～ ・教科書…東南アジアの日本軍、日中戦争 10 分 処刑、ロームシャ、朝鮮・台湾の人々、抗日運動 ・ 歴史紙しばい 「雪山に生きぬく十三年」15 分 地域資料 三和の戦没者からわかること(2020 年度 8 年作成資料) アジア・太平洋戦争と民衆・国民生活の構造図パネル貼り 15 分 三和の硅石(マンガン)採掘ワークシート記入 5 分
9	アジア太平洋戦争と三和②～大阪大空襲と三和の学童疎開～ ・教科書…餓死・玉砕・特攻隊、本土空襲、沖縄戦・原爆投下 ・ 地域資料 福知山海軍航空基地づくりと工場疎開、学童疎開 →「なぜ国民は戦争を止められなかったのか」アンケート →感想
10	「なぜ国民は戦争を止められなかったのか」(特設授業) ・アンケート集約… ・あめとムチ ～大正デモクラシーの中で～ 普通選挙法の成立、治安維持法の成立、大日本帝国憲法の発布 教育勅語の制定、ポツダム宣言 ☒言論・表現の自由、知る権利が保障されていなかったことを帝国憲法、 治安維持法等を通して確認
11	日本国憲法の制定と福知山・三和 歴史紙しばい 「リンゴの唄」 地域資料 三和中学校の日本国憲法の歌、日本国憲法作成委員会委員長芦田均 ☒教科書…本土決戦か降伏か、焼け跡からの出発、もう戦争はしない、 新しい教育が始まる

以下では受講した児童の感想の一部を抜粋する。

視点①日本が戦争を起こさないためにはどうする

視点②外国と良好な関係を保つためにはどうする

視点①感想：

戦争は相手国の土地や資源などのためにおこなわれるし、自分から仕掛けたら相手も反発して戦争になるから、国内では自分の国土はこれと変えずにやっていく。また、憲法に沿って政治などを進めていけば、法律もでき安定した暮らしができると思います。

視点②感想：

考え方というのは、国それぞれ違うのでいいと思う。それを無理やり同じ考え方にしようとか支配しようとするのはおかしいと思う。社会主義や資本主義など以外にも色々な考え方が尊重されるべきだと思う。つまり、今のウクライナとロシアの場合だと考え方の違いみたいなので、争いが起きようとしている。だから外国の文化や習慣、政治の行い方などを指摘したり、支配下におこうとせず、その国を尊重することが戦争をおこさないようにすることにつながると思う。

総括的な感想：

私はこの三和創造学習で三和と戦争のつながりや三和の歴史、日本の歴史などいろいろなことを知ることができました。教科書にのっているような世界の出来事と福知山や三和町はどのように関わっているのか面白かったです。人々は団結すればどんなことにも立ち向かえるということが学びました。普通選挙や女一揆、労働争議など、国が相手でも大会社が相手でも、たくさんの人が集まれば、立ち向かえるとわかりました。長い時間を通して、たくさんの知識を増やすことができました。実際に現地に行って実物や写真を見たりして、いろいろな体験をさせていただきました。



図6 福知山城で歴史学習

取り入れた学習デザイン要素：

◎地域歴史と世界史の統合；◎社会参加と市民意識の育成；

◎実地体験と感情的なつながり；

◎探究学習と深い理解；◎反映と自己表現.

●7年 地域の歴史・民話を演劇に

7年～9年の三和創造学習は事前学習を含めた校外学習・修学旅行での学びと、学んだことの文化祭での演劇などの表現である。内容は大きく三和の里山文化・里山生活に関わるものと多文化共生・戦争平和である。

○文化祭演劇「念々像が語るもの」 2020年度

2020年度はコロナ禍で舞鶴校外学習は中止したが、文化祭に向けて、三和芦洲廣雲寺の学童疎開

児童が戦後 50 年を過ぎて寄贈建立した「念々像」にはストーリーがあり、ここから演劇の脚本をつくることにした。事前学習で戸田恵梨香主演の「あの日のオルガン」(2018 年制作・京丹波町ロケ地もあり)という東京の保育園の学童疎開を描いたものを視聴してイメージづくり、さらに、ピースおおさかから借りた DVD「大阪大空襲」を見て、1944 年 9 月に三和に来た大阪豊仁国民学校の学童疎開と大阪大空襲の関わりを私が話した。京都府では福知山市と天田郡(夜久野・三和)が大阪市大淀区(現北区)の児童の学童疎開を受け入れた。三和に学童疎開に来ていた児童たちは大阪方面の空が赤く染まるのを見ており、大阪の空襲による被害の実情・変化に応じて疎開児童の数は流動的に動いている。疎開児童の様子を疎開していた方からも直接うかがった。像を建立した元児童とその友だちを軸にした筆者の構想・構成流れをもとに、脚本を学年の先生がつくり、生徒達は廣雲寺・龍源寺の現地視察をしてイメージづくりをさらに深めた(図 7)。



図 7 廣雲寺の念々像

取り入れた学習デザイン要素：

- ◎歴史的背景の理解と感情移入；◎現地視察とイメージの構築；◎クリエイティブな表現と学習；
- ◎コラボレーションと社会的参加；◎反映と共感の促進

●8 年 京都校外学習 京都の文化とつながる丹波の文化

京都は秦氏など渡来人が井堰をつくり嵯峨野を開き、のちに平安京がおかれ、千年の都が続き、日本文化のふるさととなったところである。この都と隣接するのが丹波で、都の建材・食材・日常生活品にわたり多くの優れたものを供給し支えてきた。その点を活かしつつ、現代の三和地域の最大の課題である過疎をふまえ、地域創造につなげようと考えた(表 4)。

西陣の京町屋を訪れる前に、三和地域の築 200 年の古民家を利活用し農家民泊をされている方のお話を伺った。京町屋の方が「京町屋は火事が起きることを想定してつくられているから、古民家の方が当然立派なつくりや」という話をきいたりすると、「そうなんや」と農村、三和地域を見直す。三和町では古民家を活かし農家民泊・カフェをすることが 7 軒ある。

表 4 京都の文化をつなげる丹波の文化

三和周辺での事前学習	京都での現地学習	備 考
三和の古民家	西陣の町家	古い木造建築古民家と町家
三和・友渕の製縄所	祇園祭ぎやらりー (山鉦のわら縄)	都文化を支える丹波の文化
大原神社周辺の景観	無鄰菴庭園の借景	景観保護・日本庭園・借景
江戸時代の京街道・細野峠	清水二年坂・石堀小路	歴史的景観・景観保護
郡是スクウェア アンネのバラ	平和ミュージアム アンネのバラ	戦争と平和
三和のマンガン鉾山跡	耳塚・大仏殿跡・方広寺	朝鮮(人)との関わり

日本三大祭りの一つ、京都の夏を彩る祇園祭。そのクライマックスは動く美術館といわれる山鉦の巡行。その山鉦の組み立てに使われているのはわら縄で、かすがい・釘などは一切使わない。その山鉦が展示されている祇園祭ぎやらりーを訪れる前に、そのわら縄を作られている三和の製縄所を伺い、わら縄製作の工程や、原料のもち米のわらの入荷先などのお話を聞いた(図 8、図 9)。学園開校以後、8 年生は毎年ここを訪れている。製縄所では原料のもち米の稲わらを北関東・北陸など遠方に車で買い付けに行き、わら埃の建物内で誇りを持って 40 年間やってこられた。生徒達は声を詰まらせながら話して頂く姿を脳裏に刻む。縄作りの工程を教えてもらい、縄を絞う機械の最も研究をされた部分は時間をとり近づいてしっかり確認した。生徒は仕事に対する熱い思いを感じ取った。



図 8 製縄所見学



図 9 祇園祭ぎやらりー訪問

取り入れた学習デザイン要素：

- ◎地域文化と歴史の理解； ◎伝統技術と現代社会の結びつき； ◎地域産業と職人の尊重；
- ◎対比学習による理解の深化； ◎感情移入と共感の促進

●9 年 三和地域を活かし、三和を創造する

2020 年度はコロナ禍で学校と家庭を結ぶでのオンライン授業が始まり、「マイクロツーリズム」が唱えられ、身近な地域を見直し見つめおそうという風が吹いてきた。三和地域で「今あるものを活かし、地域イベントを企画しよう」という授業ののち、三和地域フィールドワーク。地域イベント企画につなげようとした。三和最大の観光地である大原神社と産屋、あぶらや・ふるま家の古民家巡り、羊・山羊などを飼われる牧歌的雰囲気のみわファーム、最後は高杉の河原をサンダルで歩いた。そうして、三和地域イベント、ミニツアーA4 用紙 1 枚にまとめ企画した。2021 年度は写真に頼りすぎず、自分の自由なデッサンで企画を仕上げ表現する作品が多くよかった(図 10、図 11)。

2022 年度は学校統廃合により廃校になった学校の利活用を考えさせた。事前学習での旧質美小学校の事例を紹介したのち、洋菓子店に買い取られた佐賀小学校、イチゴ農園を運動場につくった電機会社の旧中六人部小学校、福知山で唯一地元の非営利活動法人が名乗りを上げて借り上げた旧川合小学校の 3 校を訪問し、学校を利活用する良さや課題など実際に見ながら考えさせた。学習の最後に同様

にまとめ企画したチラシを1枚つくった。ムトベースの方にも見て頂いた。

2023 年度は細見・菟原小学校は借りる業者が決まり立ち入れなくなったことや時間の関係で、川合小学校と質美小学校に絞ってじっくり訪問することにした。まとめ企画も川合小学校の利活用を地域との関係も含めて考えることにした。



図 10 生徒作品 A



図 11 生徒作品 B

取り入れた学習デザイン要素：

- ◎地域資源の再発見と活用； ◎地域との連携と共創； ◎創造性と表現力の育成
- ◎実践的問題解決と探究学習； ◎地域の持続可能な発展の理解

3.3 学習する地域(フィールド)のバランス

三和学園開校年の三和創造学習は開校1年目の実践が受け継がれやすい、三和のすべての谷に入って実践してほしいという校長の思いもあり、その後の指針として1年～9年の実践に反映させた。特に旧小学校で必須だった柱になる実践を菟原・細見・川合地域に分散させ、2022 年度からは川合小学校の展示教室を活用しているのも特徴である。また、防災の学習やかんがい水路の学習は菟原と細見地域を交代で行い、防火の消火栓、防火水槽などをめぐる学習は毎年調査する自治会を変更するようにしてきた。

菟原(3年ぶどう3回)(6年京街道・細野峠・本陣)(5年轟水・上井根)

細見(5年大ゆり井堰・水路)(4年58 災の細見谷)(7年草山里山生活)(3 年京街道散策)(1・2 年雑木林を歩く)

川合(5 年農業田植え稲刈り川合小学校)(3 年大原神社防火・川合小学校・鮎民話)

三和創造学習は学習する地域（フィールド）のバランスについて、地域の異なる特色を生かしながら、生徒たちに多様な学びの場を提供し、総合的な地域理解を促進することを目指している。地域の多様性の活用、地域特有の学習テーマの展開、年次を通じた学習の連続性；防災と環境管理の重視；地域資源の保存と活用といった側面から地域を理解する機会を提供し、生徒たちが総合的な視点から地域について学ぶことを促進する。それぞれの地域の独自性を尊重しつつ、地域間の連携と学習の連続性を重視することで、地域全体のバランスの取れた学習環境を実現していく。

4. 考察

4.1 地域学習の意義

●感性的認識の役割に関する探求：児童・生徒の発達における根本的保障

ここでは、地域に存在する具体的な物質的要素に焦点を当て、これらが児童・生徒の学習プロセスに与える影響を探究する。地域の具体物を介した教育は、直接的な体験と感性的認識を通じて、学習者の認知発達に重要な役割を果たすことが示唆されている。人間は進化の過程で五感を駆使し、その感覚を研ぎ澄ませることで生存し、発展してきた。この感覚的体験は、人類の認知的成長と進化の基礎を形成し、思考の発展を促進してきたと考えられる。

具体物に直接触れ、感じることで、周囲の音や匂いを認識することは、人間が人間たるための基本的な活動である。児童・生徒による感動の表現、「すごい」「ええっ」といった反応は、感性的な体験が次なる行動や意欲、さらなる探求へとつながることを示唆している。例えば、鮭の卵から稚魚がふ化する瞬間を目撃した児童たちの行動は、愛着と責任感の形成を通じて、最終的に稚魚を環境に放つ行為へと繋がっている。このような感性的認識は、学習者の発達において不可欠な要素である。

現代の教育現場において、児童・生徒が体験する「時間」の価値を重視し、彼らの感性的成長を大切に見守ることが求められる。人間性の育成において、感性的体験が果たす役割は、現代社会において人間らしさの再考を促す重要な要素である。

●地域コミュニティにおけるロールモデルの影響：児童・生徒の自立とアイデンティティ形成

ここでは、自立期にある中学生が地域コミュニティの成員との直接的な交流を通じて、個人の生き方や価値観を探究する過程に焦点を当てる。特に、4年の地域の発展に尽くした先人や7年～9年の「地域に学ぶ講座」、7年「ジョブガイダンス」において創造的な経歴及び個性をもつ人々からの話は、生徒たちに強い影響を与え、彼らの自己認識と人生観の形成に寄与すると考えられる。

直接的な対話を通じて伝わる生の経験や情熱は、学生たちに独特の影響を及ぼす。これは、実際の場の雰囲気や、話者の表情、声のトーンといった非言語的な要素が、内容の理解と感情の共感に深く

関わっているためである。特に人権、平和、そして生命の尊重といったテーマは、通常の学校教育では集中しにくい生徒たちの注意を引き付けることも多い。

地域の人々、特に地元で育った人々からの話は、生徒たちに地域に対する自信や愛着、誇りを感じさせる。このような交流は、地域コミュニティへの所属感を与え、彼らが自己のアイデンティティを育むための基盤となる。地域での様々なロールモデルとの出会いは、思春期の生徒にとって特に重要であり、彼らの将来の選択や価値観の形成に深い影響を与える可能性がある。

さらに、福知山公立大学生との交流は、中学生たちにとって有意義な学びの場となる。中学生、大学生が共通して学んだ三和地域や話題となる人々や、中学生・高校生時代を振り返りながら話をする近い世代の大学生からの話は、生徒たちに新たな視点を提供し、彼らの未来への探求心を刺激する。これらの経験は、中学生たちにとって通常では得られない貴重な学びであり、彼らの人生の方向性を考えるうえで重要な役割を果たす。

●地理学的認識と歴史的文脈の統合：地形と自然環境に対する理解の深化

ここでは、三和地域における地形学的特性と自然環境の理解がいかんにして児童の認知発達と地域に対する認識に影響を与えるかに焦点を当てている。地域散策や地図作成活動を通じて、児童は地形と自然環境に対する直感的かつ主観的な理解を形成し、それを通じて空間認識能力を育成する。児童たちが作成する地図は主観的な要素を含むが、これらは位置関係の把握と空間認識の初期段階としての意義を持つ。

地域の地形は、谷間の農村である三和地域では、集落の配置、交通路の形成、そして日常生活の様式に深く影響を与える。地域内の散策を通じて、生徒たちは地域の地形的特性を肌で感じ、それがどのように地域の歴史、文化、そして生活に影響を与えているかを体験する。また、防火の学習や防災教育において、地域の地形理解は重要な要素となる。地域のジオラマを使用することで、児童たちは地域の地形的特性と防災に関する理解を深め、実際の生活空間と地形的特性の関連性を理解する。

地域の歴史的文脈と地形的特性の理解は、水難に関わるお地藏様やお不動様などの文化的要素を通じてさらに深化する。これらの文化的要素は、地域の地形が歴史的にどのような役割を果たしてきたか、地域住民が自然環境とどのように共生してきたかを示している。地形理解の重要性は、過去の生活様式を振り返ることによっても強調される。過去には、電気や大規模な土木工事が無い時代に、人々は自然や地形に従って生活し、生産活動を行ってきた。

本稿は、1年生から9年生までの学習プログラムを通じて、三和地域全域の地形的、歴史的特性を統合的に理解することの重要性を強調している。地域を歩くことに重きを置くこのアプローチは、児童、生徒たちに地域の地形と歴史に対する深い理解と共感を育成し、地域に対する包括的な視点を提供する。

●生産労働の原理と人間の身体との関連性：伝統的生産技術の探究

ここでは、近代産業革命以前の社会における生産労働の原理と、人間の身体がその中で果たす役割に焦点を当てている。三和地域におけるぶどう栽培、養蚕、米作りといった基幹農業活動を通じて、学生たちは生産労働の基本原則を体験的に学ぶ。特に、人間の手足や指が道具としてどのように活用されてきたかを探究することは、生産労働の本質的な理解に寄与する。

唐箕や箕の使用など、人力による風力を利用した選別作業や、藁からわら縄を作る過程は、生産労働の原理を体現している。これらの過程は、物質の固有の性質を活用し、人間の緻密な技術と知識に基づいて行われる。生産労働の原点を理解することは、技術の進化とその歴史的な文脈に対する深い洞察を提供する。

また、学生たちは糸車の使用や繭から生糸を作るプロセスを通じて、生産労働における身体と道具の関係性を直接体験する。このような活動は、生産労働がいかんして人々の生活を豊かにしてきたか、そしてそれが文化的な遺産としてどのように受け継がれてきたかを理解する上で重要である。

本稿はまた、地域の民俗資料とその使用方法に対する理解が途絶えてしまう可能性にも注目している。伝統的な農具や蚕具の展示方法や、その知識の伝承方法には改善の余地があり、これらの資源がいかんして現代社会において活用され、価値を継承されるかは今後の重要な課題である。本稿を通じて、生産労働の原理と人間の身体との関連性に対する深い理解を促進し、伝統的な生産技術とその文化的意義に光を当てることを目指す。

● 地域における世代間交流の重要性とその教育的価値

ここでは、地域コミュニティにおける世代間交流の重要性と、その教育的価値に焦点を当てている。近年の社会変動、特にスクールバスの普及による通学方法の変化は、地域の高齢者と児童・生徒との日常的なふれあいの機会に影響を与えている。かつて、徒歩通学時代には、高齢の地域住民が児童の安全を見守り、日常的な交流が行われていたが、その機会は減少している。

しかし、交通整理を行う地域の方々との交流や、卒業式前の生徒と地域の方々との感謝のやり取りは、世代を超えた交流の重要性を示している。このような交流は、地域社会における連帯感と互いの尊重を促進し、共同体の絆を強化する。

特に、地域の歴史や文化を伝える高齢者との交流は、児童・生徒に大きな影響を与える。例えば、養蚕農家の暮らしを学ぶ「訪問蚕」の取り組みは、高齢者と児童・生徒の間で豊かな感情的な交流を生み出し、互いの理解と共感を促進する。昔の養蚕用具を使った交流は、歴史的な知識の伝達と共に、高齢者の経験や感情を共有する貴重な機会を提供する。

本稿は、地域における世代間交流が、児童・生徒の社会的、感情的な発達に対して重要な影響を与えることを強調する。この交流は、地域の歴史や文化の伝承、社会的結束の促進、世代間の共感と理解の構築において重要な役割を果たす。地域社会における世代間交流の促進は、児童・生徒にとって豊かな教育経験を提供し、地域の持続可能な発展に貢献すると考えられる。

● 地域産業の体験学習：三和地域の経済活動と就業の可能性の探究

ここでは、三和地域における第一次産業（農業）、第二次産業（工業）、第三次産業（サービス業）を通じた経済活動の多面的な探究に焦点を当てている。この地域の自然環境や交通アクセス等の特性を理解し、生徒たちがこれらの産業に対する体験的な学習を通じて、地域の経済構造とそこでの就業の可能性についての理解を深める。

農業活動では、稲作体験や果樹栽培、畑作などに焦点を当て、移住者による新たな農業の導入にも注目する。工業活動に関しては、地域の工業団地の視察を通じて、生産現場の様子や地域で働く人々の生活、さらには産業インフラの構造について学ぶ。第三次産業においては、サービス業、特に地域の古民家カフェや農家民泊などの視察を通じ、地域の文化とサービス産業の結びつきを探究する。

この多角的な産業体験学習は、地域経済の理解だけでなく、地域における就業の機会やキャリア形成についての認識を深める。特に、地域の歴史や文化を背景にしたサービス産業の探究は、生徒たちに地域の個性と魅力を理解させ、地域への観光客誘導の可能性について考えさせる。このような学習は、地域の文化的資源を活用した経済活動の重要性と、地域に根ざした持続可能なキャリア構築の機会を提供する。

本稿を通じて、生徒たちは自身が生活する地域の経済活動に関する深い理解を得るとともに、地域における多様な職業とキャリアの可能性を探究する。三和創造学習の取り組みは、地域の産業に対する理解を深め、生徒たちに地域への貢献と自身のキャリア形成について考える機会を提供する。

●地域の歴史教育における主権者教育の重要性：三和地域の歴史的人物と出来事の学習

ここでは、地域の歴史教育が、生徒たちに地域に根ざしたアイデンティティと主権者としての意識を育成する重要な手段であることに焦点を当てている。三和地域の歴史的人物と出来事の学習を通じて、生徒たちは地域の歴史の流れの中で自己の位置を理解し、地域社会に貢献する人材としての自覚を育成する。

地域の歴史上の人物を学ぶことは、生徒たちに地域愛と地域への所属感を感じさせ、地域で生きることの意義を理解させる。歴史的な背景を有する農業や養蚕などの生産活動の学習は、生徒たちに地域の過去と現在の経済活動に対する深い洞察を提供する。また、地域の歴史的人物の学習は、地域の地名や文化的要素と関連付けることで、生徒たちの親近感を高め、地域の歴史を身近なものとして理解させる。

特に、大正デモクラシー、治安維持法、戦争への対応などの歴史的出来事の学習は、生徒たちに主権者としての批判的思考能力を養成する。2021年度の6年生の学習では、15年戦争に関わる歴史学習を通じて、生徒たちは民衆の民主的な動きとそれに対する政府の反応、戦争の経過と地域社会との関連を理解し、現代の国際情勢との類似点を見出すことができた。これは、生徒たちに歴史の教訓を現代に生かす力を育成する。

本稿は、地域の歴史教育が生徒たちに与える影響と、主権者教育の観点からのその重要性を強調する。地域の歴史上の人物と出来事の学習は、生徒たちに地域に対する深い理解と責任感を育て、批判

的思考と主権者としての意識を養成する重要な手段である。

●地域と世界をつなぐ教育：地域文化学習と多文化共生・平和学習の統合

ここでは、地域文化学習と多文化共生・平和学習という2つの重要な教育的テーマを統合することにより、生徒たちが地域社会と世界社会の両方で生きるための知識とスキルを獲得するプロセスに焦点を当てている。開校から5年間の小中一貫校における実践を通じて、地域と世界の課題に対する包括的かつ体系的な学習フレームワークが定着している。

地域文化学習においては、三和地域の過疎化という現状から出発し、地域の文化、歴史、自然環境などに深くふれることを通じて、生徒たちは地域の現状と課題に対する理解を深める。また、多文化共生・平和学習では、世界的な課題と三和地域内に住む外国人住民との共生という地域課題を結びつけ、生徒たちは多文化理解と平和への意識を育成する。

教育的アプローチとして、小学校段階では教科の学習を基盤とし、中学校段階では校外学習や修学旅行を活用することで、地域文化学習と多文化共生・平和学習が自然に統合される。特に9年生の到達点として、地域文化学習では三和地域のツアーや廃校跡地の利活用に関する企画を通じて、地域創造に向けた実践的な学習が行われる。また、多文化共生・平和学習では、文化祭での演劇発表を通じて、生徒たちが学んだ多文化理解と平和への意識を表現し、共有する。

本稿は、地域と世界をつなぐ教育の重要性を強調し、地域文化学習と多文化共生・平和学習の統合が、生徒たちに地域社会と世界社会の両方で活動的に参加し、貢献するための知識とスキルを提供することを示している。

●地域教育遺産の継承とその教育的価値

ここは、過疎地での地域教育遺産の継承とその教育的価値に焦点を当てている。地域の自然環境、土地利用、歴史的遺構、そして三和地域の人々の労力の証となる要素を「地域教育遺産」として位置づけ、これらを通じた学習が地域社会の存続と発展に不可欠であると考ええる。

地域教育遺産の継承は、生徒たちが地域の山、川、田んぼ、畑、果樹園などの自然環境、過去の農業活動、水源の歴史などを深く理解することを可能にする。また、防災教育を含め、地域特有のリスクとその対策についての知識を育成し、地域に対する興味と理解を深める。

本稿はまた、地域教育遺産を通じた学習が、地域住民との出会いやふれあいを促進し、生徒たちの記憶に刻まれる豊かな体験を提供することを強調する。これらの体験は、生徒たちが生まれ育った地域を「ふる里」として深く思い入れることに寄与し、地域社会に対する愛着と所属感を育成する。

地域教育遺産の継承というアプローチは、9年間の教育プログラムを通じて、小学校から中学校に至るまでの学習と体験を統合することで、生徒たちに地域の自然環境、歴史、文化に対する深い理解を育成し、地域社会の持続可能な発展に貢献するものである。

4.2 都市住民への提起

●農業・水路学習と防災への理解の深化

ここでは、農業や水路に関する学習を通じた防災への理解の深化とその都市住民への提言に焦点を当てている。特に、地域の農業や水路に関する具体的な体験学習は、都市住民に対して、農村部の重要な機能とその環境上の役割についての意識を高める機会を提供する。

5年生の農業学習では、細見川上流の井堰から大ゆり水路をたどりながら、山間部での農業の歴史や林業の影響を理解する。この学習は、林業の放棄による保水力の喪失とその下流への影響、洪水や土砂災害のリスクの増加など、農業と防災の密接な関係を示す。この実地学習は、水路の管理と保護に関する具体的な行動、例えば水路にひっかかったゴミの除去を含み、水田への水の流れとその重要性を体験させる。

さらに、農林水産省が提供する「農業・農村の多機能」に関する冊子を用いて、農業や農村が洪水防止、土砂流出の抑制、川の流れの安定化、地下水の生成、生物多様性の維持、景観保全など、多様な機能を持っていることを学ぶ。この学習は、農村部の重要性和、都市部の住民に対して農村部が果たす役割の理解と尊重を促進する。

都市住民、特に子どもたちに対しては、米作りに要する労力、水路の管理の重要性、農村部が環境と社会に提供する多様な機能についての理解を深めてもらいたい。このような提言は、都市部と農村部の間の相互理解を促進し、持続可能な社会の構築に寄与し、都市住民に対して農業や水路に関する教育の重要性を訴え、農業・農村部の多機能性に対する意識を高めることを目指す。

●サケの生態と生産活動への参与の教育的価値

ここでは、サケの生態に基づいた生産活動の学習が、都市住民に対して生産プロセスへの理解を深めることを通じて、生産物の適正な価値の認識を促進する重要な手段であることに焦点を当てている。特に、サケの卵から稚魚への育成プロセスは、自然環境と人間の生産活動との関連性についての深い理解を提供する。

3年生が行うサケの卵の育成と放流の活動は、サケの生態や回遊の過程を直接体験することを通じて、生徒たちに生物多様性と環境保全の重要性についての意識を高める。サケの回遊と産卵のサイクルは、自然界の複雑な相互依存関係と生態系のバランスを示す具体的な例である。この学習は、生徒たちに自然環境に対する敬意と責任感を育成し、持続可能な生産活動の重要性を理解させる。

また、都市部に住む消費者にとっては、食料や農産物の生産プロセスに関する体験学習は、生産物の価値とその生産に要する労力に対する適切な評価を促進する。このような学習は、消費者と生産者との間の相互理解を深め、食料生産に対する持続可能な姿勢を促進する。

本稿を通じて、都市住民に対してサケの生態に基づいた生産活動への参与の教育的価値を訴え、自然環境と人間の生産活動の相互依存関係に対する理解を深めることを目指す。サケの育成と放流の活動は、生徒達に生物多様性の重要性を教え、持続可能な生産活動の価値を育成する重要な手段である。

●三和地域における観光と地域文化の継承

ここでは、三和地域の文化的遺産と自然環境が、教育旅行や一般観光において重要な資源であることに焦点を当てている。地域の歴史、文化、自然環境を活かした観光は、地域経済の活性化と文化遺産の継承に不可欠である。

三和地域における農業、水路、歴史的道、古民家などの資源は、都市住民にとって興味深く、教育的価値の高い体験を提供する。特に、地域の自然環境と結びついた農業体験、歴史的道の探索、地域文化を体験する古民家訪問は、都市住民にとって新たな発見と学びの機会を提供する。

本稿では、三和地域の歴史的道、養蚕神社、農業体験、古民家カフェなどの観光資源の魅力と教育的価値を示す。これらの資源は、都市住民に対して地域の歴史や文化に深くふれる機会を提供し、地域社会との相互理解を促進する。さらに、地域文化の継承を通じた観光は、地域経済の活性化と文化遺産の保存に寄与する。

都市住民に対しては、三和地域の自然環境、歴史、文化を活かした観光が、地域の多機能性と独自性を理解し、地域社会への敬意と関心を高める機会を提供することを強調する。三和創造学習を通じて提供される里山文化や地域文化の体験は、都市住民にとって魅力的な学びと発見の場となり、地域社会との共生と相互理解の促進に寄与する。

4.3 地域資源の活用と地域づくり

地域資源の活用は、三和創造学習を通じて実現される。近年、多くの地方自治体が地域資源の発掘に注力しており、地域固有の歴史文化（例えば、明智光秀や大江山の鬼のような要素）は、地元住民や旧大江町の関係者の積極的な関与により、後世へと継承されている。このような地域の歴史文化を育成するためには、適切な土壌が必要である。

三和地域は、その特有の歴史や文化、他地域では見られない独自の要素を有している。地域資源の掘り起こしを進めることで、これらの個性はより明確になる。このプロセスを通じて、三和創造学習に参加する児童生徒に、地域固有の価値に触れさせ、理解させることが重要である。地域に存在する資源を活用することで、三和地域の発展に寄与し、将来的な地域づくりに繋がることが期待される。

毎年9年生が取り組む三和地域イベントやミニツアー、廃校活用の取り組みは、地域資源の活用を促進する教育プログラムの一環である。三和の地域資源を生かし、その独自性や創造性を発揮する取り組みを通じて、地域づくりに貢献することが期待されている。これらの取り組みは、地域の持続可能な発展に寄与する重要な要素として認識されている。

4.4 三和創造学習の今後の取組・展望

三和創造学習の将来的な取り組みとして、旧川合小学校を川合地域の中核と見なし、「川合・三和ふるさと資料館（仮称）」の設立を計画している。この資料館では、地域特有の文化や歴史を展示し、継承することを目的としている。特に、過疎化が進む地域での資料館の設立は、地元の小学生や住民

に親しみやすい形で地域の歴史を伝える意義深い取り組みである。

与謝野町立三河内郷土資料室の館長 O さんは約 50 年前にヨーロッパを旅してどこの農村をまわっても地域の資料館があることに驚いて、地元で資料館をつくられたという。その経験から学び、地域の小学校を文化の中心として位置付けることの重要性を認識している。福知山市では、地元で閉校した小学校を利用した取り組みに地域住民や法人の協力を得ながら、努力が続けられている。

しかしながら、この取り組みにはいくつかの課題が残っている。特に、地域学習を支える地域講師への支援体制の弱さや、地域資源を活用・保存する人材の不足が挙げられる。地域の歴史文化を継承する役割は、学校に依存している比重も大きく、地域住民との協力が不可欠である。地域住民は、子どもたちの教育のために力をかけており、より効果的な手法や施策を考案し、実践していくことが求められている。これらの課題に対処することで、三和創造学習の取り組みは、地域の継承と発展に寄与し、地域社会にとって価値あるものとなる。

5. おわりに

過疎化と高齢化が進む中、筆者は三和地域との 10 年に及ぶ関わりを経て、地域固有の歴史文化の継承の重要性をより明確にしてきている。時間の制約の中で、文化遺産の保存と伝承に力を注ぐことは、地域のアイデンティティを守り、次世代への貴重な教訓を伝えるために不可欠である。

地域の学校は、教育の場であると同時に、地域社会の中心としての役割を担っている。特に、三和に残る唯一の小中一貫校は、地域の象徴であり、地域住民の絆や共同体意識を育む場としての役割を果たすべきである。学校が閉じることは、単に教育施設の喪失以上の意味を持ち、地域の文化や歴史の継承にも大きな影響を及ぼす。

したがって、地域の学校を大切にし、地域の歴史文化の継承に向けた取り組みに積極的に関わることは、現在と未来の両方にとって価値ある投資となる。地域固有の文化資源を活用し、地域住民、特に高齢層と若者をつなぐプロジェクトやイニシアティブを推進することで、三和地域の持続可能な発展に寄与し、豊かな文化遺産を次世代に継承できることを期待する。

謝辞

本稿における三和創造学習を通じて実施された児童生徒の地域学習に対し、ご指導及びご支援を賜りました関係者の皆様に、深く感謝の意を表す。

参考文献：

- (1) 総務省 HP「小中高等学校の統廃合の現状と課題」(https://www.soumu.go.jp/main_content/000638148.pdf)〈2024 年 1 月 27 日最終確認〉
- (2) 西村吉弘(2014)：「学校統廃合後の地域の位置づけとその課題」，国立教育政策研究所紀要，143，167-181.

- (3) 梅田美鈴・藍澤宏・鈴木麻衣子(2004):「児童の育成における小学校と地域社会の連携のあり方に関する研究－小学校の立場からみた二者の関係と今後の方針－」, 日本建築学会計画系論文集,69(581), 25-32.
- (4) 松本京子・岳野公人・浦田慎・松原道男・加藤隆弘・鈴木信雄・早川和一(2017):「地域に根ざした学校教育活動が子どもの定住志向に与える影響に関する研究－石川県能登町における海洋教育の事例から－」, 環境教育, 27(1), 1_16-22.
- (5) 矢口芳生(2020):「『地域協働型教育』実践の検証と展望－京都府福知山市三和町を対象として－」, 福知山公立大学研究紀要, 3(1), 5-69.
- (6) 岡部成幸 (2023):「三和地域の暮らしと住民自治」, 福知山公立大学地域経営演習 I 講義資料.

Abstract :

This paper focuses on the reconstruction of community learning designs in consolidated regional elementary schools, using the Miwa Creation Learning at Miwa Academy in Fukuchiyama City, Kyoto Prefecture as a case study. It introduces the concept of "Local Educational Heritage" to reassess the value of regional characteristics that should be passed on to future generations. Specifically, it analyzes learning design elements such as experiential learning, connection with local culture, multifaceted learning content, development of emotions and empathy, collaboration with local communities, environmental learning and sustainability, acquisition of practical skills, and the fostering of continuous learning and interest. This paper highlights the multifaceted significance of community learning, including the independence and identity formation of students, a deeper understanding of geography and the natural environment, exploration of traditional production techniques, and the importance and educational value of intergenerational exchange. Furthermore, it aims to promote mutual understanding between urban and rural areas, contributing to the construction of a sustainable society. The paper demonstrates that experiences of satoyama (managed woodland) culture and local culture provided through Miwa Creation Learning offer urban residents valuable learning and discovery opportunities, fostering coexistence and mutual understanding with the local community.